

〔研究ノート〕

# 正義論のための世界モデル：試論

下 地 真 樹

## I はじめに

正義について語ることは、世界のあるべき姿について語ることである。もし、現実がその語るとおりになっていれば「これでよし」と納得し、そうならないならば「現実を変更せよ」と命じるものである。つまり、正義論は現実世界と可能世界についての語りである。ならば、そもそも、それらについて語るができなければならない。現実世界と可能世界とはどのようなものであり、互いにどのように関係しているだろうか。いかにして現実世界と可能世界について思考することができるのだろうか。そして、それを語るとはいかにして可能なのだろうか。こうした一連の問題群に対してどのような態度を取るかは、正義論を考える上でメタ的な重要性を持つ。

現実世界と可能世界の全体は、いかにあるのか、いかに思考しうるのか、いかに語りうるのか。これら一つ一つの問題は、三つの次元に関わる問題である。第一に、何かが存在したりしなかったりする場、私の前に広がる世界がある。第二に、世界について思考する場がある。第三に、その思考が表現される場がある。それぞれ存在論的／認識論的／言語論的世界と言ってもいいかもしれない。ひとまず簡単に、存在／思考／言語の次元と呼ぶことにしよう。これら三つの次元にまたがる問題群は相互に緊密な関係を持っており、体系的で整合的な解答を与えなければならない。

ウィトゲンシュタインの古典的著作『論理哲学論考』<sup>1)</sup>は、まさに、この問いに取り組んだ著作である。序文から少し引用しよう。

かくして、本書は思考に対して限界を引く。いや、むしろ、思考に対してではなく、思考されたことの表現に対してと言うべきだろう。というのも、思考に限界を引くには、われわれはその限界の両側を思考できねばならない（それゆえ思考不可能なことを思考できるのでなければならぬ）からである。

したがって限界は言語においてのみ引かれうる。そして限界の向こう側は、ただナンセンスなのである<sup>2)</sup>。

「思考されたこと」・「思考」・「思考されたことの表現」、これらがそれぞれ、先に「存在」・「思考」・「言語」と呼んだものに対応する。本稿は『論考』ならびにその関連研究を手がかりに、三つの次元からなる世界のモデルを提示することを試みる。

議論は以下のような手順で進められる。『論考』は、まず現実世界から出発する。現実世界をその構成要素に分解していき、「対象」という概念を取り出す（II）。これは世界の原子にあたるようなものである。それから、この概念を再結合して、現実世界と可能世界の両方を含み持つ「論理空間」という概

念を構成する(Ⅲ)。以下、可能世界についての概念整理(Ⅳ、Ⅴ)、思考／言語の二つの次元の導入(Ⅵ)、「語りえぬもの」についての分析(Ⅶ、Ⅷ)と続き、最後にまとめる(Ⅸ)。

本論に入る前に、本稿の位置づけについて、一言述べておく。本稿は、ウィトゲンシュタイン研究の巨大な流れに参入するというよりも、むしろそこから正義論の構想に対して有益でありえるものを汲み取ることを意図している。よって、既存研究の検討は極めて限定的である。主に参照したものは『論考』本体ならびに野矢茂樹『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』<sup>3)</sup>である。他の研究も参照してはいるが、可能な限り、これら二冊に限定して検討している。

## Ⅱ 現実世界を解体する

さて、モデルの中身を検討していくことにしよう。『論考』の冒頭の一節からスタートする<sup>4)</sup>。

一 世界は成立していることがらの総体である。

「成立していることがら」とは、たとえば〈ウィトゲンシュタインはウィーン生まれである〉<sup>5)</sup>といった、現実世界で成立している事実のことである。これに対して、〈ウィトゲンシュタインは結婚していた〉などのように、「可能性としてはありえるが現実には成立していないことがら」もある。とすれば、この一文は「世界は可能性に留まっていることがらを含まない」ことを含意している。ここでウィトゲンシュタインは、「世界」という語を「現実世界」のみを意味し、「可能世界」を含まないものとして導入している。

もちろん、私たちは現実世界にのみ留まっているわけにはいかない。私たちは今とは異なる世界、今とは異なる状況を想像し、その状況へ向かって進んだり、あるいはそれを避けるために注意したりする。思考するためには、現実世界とは区別された可能性の世界が導入されなければならない。

現実世界と現実ではない可能性の世界の全体を含むような概念を、ウィトゲンシュタインは「論理空間」と名付けた。『論考』において、「論理空間」は次のような手順を経てモデル化される。第一に、現実世界をその構成要素に分解していく。第二に、その構成要素の組み合わせのヴァリエーションとして、元々の現実世界と共に可能世界を包み込むより広大な世界、すなわち論理空間が導入される。では、実際に手順を追っていこう。

一・二 世界は諸事実へと分解される。

ここでの世界はもちろん、現実世界である。現実世界は諸事実へと分解される。事実とは、たとえば〈机の上に赤い本がある〉というような、現実に成立しているなんらかの事態のことである。そして、次の文に現れているように、世界は余りなく、個々の事実に分解される。

一・一一 世界は諸事実によって、そしてそれが事実のすべてであることによって、規定されている。

事実はさらに細かい単位に分解される。事実の構成要素であるより小さな単位を「対象」と呼ぶ。野矢によれば、対象は三種類に分類できる<sup>6)</sup>。例として、〈机の上に赤い本がある〉という事実を分解してみよう。第一に、〈机〉、〈本〉といった具体的な対象がある。これらを「個体」と呼ぶ。第二に、〈赤

い)のように、個体の属性として結合する対象がある。これを「性質」と呼ぶ。第三に、〈…の上に〉のように、複数の個体の間を関係付ける対象がある。これを「関係」と呼ぶ。事實は、こうした三種類の対象の結合と見なすことができる。

ここで一つ、注意すべき点を確認しておこう。世界は事実の総体、すなわち事実をかき集めたものであるが、他方、事實は対象をかき集めたものではない。事實は対象が結合したものである。つまり、〈机の上に赤い本がある〉という事實は、{〈机〉, 〈本〉, 〈赤い〉, 〈…の上に〉, 〈ある〉} という対象の集合で表せるものではない。あくまでも事實は、〈机がある〉, 〈赤い本がある〉, そして前者と後者が〈…の上に〉でつなげられている, その特定の結合にある。しかし、対象の集合で表してしまうと、〈赤い本の上に机がある〉という状況を排除できない。また、〈机が本〉だったり、〈赤いの上に机〉だったりといった、意味不明な結合を排除できない。よって、事實は対象の結合であって、集合ではない。

### Ⅲ 論理空間を構成する

さて、ここまでで現実世界が事実に解体され、諸事実が諸々の対象に解体されるところを見てきた。事実／対象は、いわば、現実世界を構成する分子／原子のようなものである。では、ここから反転して、可能世界をも含む論理空間の構成へと向かうことにしよう。

まず、「論理形式」という概念を導入する。「論理形式」は、対象の結合可能性を制約する条件である。たとえば、〈赤い〉という性質が〈本〉という個体に属することによって、〈赤い本〉となった。〈赤い〉という性質は、〈本〉のような個体と結合することが可能なのである。もちろん、結合可能な対象は〈赤い〉だけではない。〈黒い〉, 〈青い〉, 〈白い〉などの、同様に色に関わる性質を持つことができる、つまり〈黒い本〉, 〈青い本〉, 〈白い本〉となることが可能だろう。〈本〉は色に関わる性質と結合することができる。このような状況を指して、「〈本〉は色という論理形式を持つ」と言う。論理形式とは、つまり、こういうものである。他方、〈赤い〉は〈…の上に〉と結合することはできない。もちろん、〈黒い〉, 〈青い〉, 〈白い〉と結合することもできない。このとき、「〈…の上に〉は色という論理形式を持たない」と言える。これによって、〈赤いの上に机〉などの意味不明な結合を排除することができる。

すべての対象は、その対象に固有の論理形式を持っており、その形式を守る限りにおいて他の対象と結合することができる。たとえば、{〈机〉, 〈本〉, 〈赤い〉, 〈…の上に〉, 〈ある〉} という対象の集合を用いて、可能な結合を列挙してみよう。〈机がある〉, 〈本がある〉, 〈赤い机がある〉, 〈赤い本がある〉, 〈机がある〉 & 〈赤い本がある〉, 〈机がある〉 & 〈赤い本がある〉, 〈机がある〉 & 〈机がある〉 (= 〈二つの机がある〉), 〈机の上に赤い本がある〉等々。こうしたさまざまな結合が可能である。これら諸対象の結合を「事態」と呼ぶ。

出発点とした事實は〈机の上に赤い本がある〉であったから、たとえば〈机の下に本がある〉であるとか、〈二つの机がある〉といった事實は成立していない。他方、〈机の上に赤い本がある〉は、対象の結合であり、現実にも成立しているものである。つまり、事態には、現実にも成立しているものとしていないものが混在している。

二 成立していることから、すなわち事実とは、諸事態の成立である。

諸対象はそれぞれの論理形式にしたがって結合する。それがあらゆる可能な状態、すなわち諸事態となる。諸事態の中で、実際に成立した事態を事実と呼ぶわけである。

ここで対象、事態（事実）、論理空間の関係を集合論的に整理しておこう。ある個体が色、硬さという二通りの論理形式を持っているとしよう。そして、それぞれの論理形式に対して {〈赤い〉, 〈青い〉, 〈白い〉}, {〈硬い〉, 〈柔らかい〉} という性質が与えられているとしよう。この個体は  $3 \times 2$  通りの可能なあり方を持っていることになる。すなわち、{〈赤い〉 & 〈硬い〉, 〈青い〉 & 〈硬い〉, 〈白い〉 & 〈硬い〉, 〈赤い〉 & 〈柔らかい〉, 〈青い〉 & 〈柔らかい〉, 〈白い〉 & 〈柔らかい〉} という集合がある。このように、ある個体の可能なあり方は、各論理形式に属する性質の集合の直積として把握することができる。さらに、このような集合が個々の個体についてあることになる。この世界に  $k$  個の個体があるとすると、これらの個体の可能なあり方を表す集合が  $k$  組あることになり、これら  $k$  組の集合の直積として、世界のすべての個体の可能なあり方の組み合わせが得られることになる。さらに、任意の二つの個体の間に成立する関係などを随時導入していけば、さらに大きな集合を得ることができる。同様に、様々な集合の直積として、巨大な、しかし有限の空間が導かれる<sup>7)</sup>。こうして、成立しうる可能な事態の集合を得ることができる。これが論理空間である。

ここで否定の扱いについて注意が必要である。〈机の上に赤い本がある〉、これは事態である。このように、何か成立している肯定的な内容からなる事態を肯定的事態と呼ぶことにしよう。では、否定的事態なるものはあるだろうか。すなわち、〈机の上に赤い本がない〉は事態だろうか。事態ではないのである。私たちが辺りを見渡したとき、そこに成立している事実は、肯定的事態でしかありえない。〈机の上に赤い本がない〉とは、〈机の上に青い本がある〉であったり、〈机の下に赤い本がある〉であったり、〈机（だけが）ある〉など、様々な事態でありえる。それらはすべて、肯定的事態として捉えられるべきものである。そして、論理空間をみたま事態は、すべて肯定的事態である<sup>8)</sup>。

整理しよう。対象は論理形式にしたがって結合し、事態を構成する。成立しうる肯定的事態の集合が論理空間である。

一・一三 論理空間の中にある諸事実、それが世界である。

諸事態の集合のうち、現実に成立しているものだけからなる部分集合が現実世界ということである。可能世界もまた、諸事態の集合の部分集合として捉えることができる。こうした部分集合のバリエーションの数だけ、可能世界のバリエーションがあることになる<sup>9)</sup>。

#### IV 要素命題の独立性

ここで、野矢の要素命題の独立性テーゼ批判を検討しよう<sup>10)</sup>。『論考』から問題の部分引用する。

四・二一一 要素命題の特徴は、いかなる要素命題もそれと両立不可能ではないことにある。

五・一三四 ある要素命題から他の要素命題が導出されることはない。

要素命題とは、言語の次元にあり、存在の次元にある何らかの事態に対応するものだ、と考えてもらえばよい。

これがなぜ問題なのか。簡単な例を考えよう。対象として、二つの個体〈本〉と〈ノート〉があり、それらは色という論理形式を持ち、色に関しては〈赤い〉, 〈白い〉という二通りの性質があるとしよう。これらの対象から構成できる事態は、{〈赤い本がある (P)〉, 〈白い本がある (Q)〉, 〈赤いノートがある (R)〉, 〈白いノートがある (S)〉} となる。これがここでの論理空間だ。表記の簡単化のため

に、それぞれP, Q, R, Sの記号を付してある。

ここで明らかにPとQ, RとSは両立しえないはずである。にも関わらず、これらの両立不可能性が『論考』の枠組では説明できないことになる。そしてこの点こそが『論考』においてウィトゲンシュタインが間違えた点なのである、と野矢は主張する。

野矢の解釈によれば、要素命題が互いに独立であるならば、論理空間のベキ集合（部分集合の集合）がすべて可能世界として成立することになる。先の例についてすべて列挙すれば、次のようになる。

$$\begin{aligned} & \Phi \\ & \{P\} \{Q\} \{R\} \{S\} \\ & \{P, Q\} \{P, R\} \{P, S\} \{Q, R\} \{Q, S\} \{R, S\} \\ & \{P, Q, R\} \{P, Q, S\} \{P, R, S\} \{Q, R, S\} \\ & \{P, Q, R, S\} \end{aligned}$$

しかし、PとQ, RとSは両立しえないから、実際には、次のようになると言うのである。

$$\begin{aligned} & \Phi \\ & \{P\} \{Q\} \{R\} \{S\} \\ & \cancel{\{P, Q\}} \{P, R\} \{P, S\} \{Q, R\} \{Q, S\} \cancel{\{R, S\}} \\ & \cancel{\{P, Q, R\}} \cancel{\{P, Q, S\}} \cancel{\{P, R, S\}} \cancel{\{Q, R, S\}} \\ & \cancel{\{P, Q, R, S\}} \end{aligned}$$

野矢のこの解釈は妥当だろうか。どうも気になる点がある。順を追って考えてみよう。事態とは、諸対象の結合であった。では、対象とは何であったのか。たとえば、〈赤い本〉で考えよう。〈赤い本〉は〈本〉という対象が〈赤い〉という対象と結合している。このとき、〈赤い〉ことは〈本〉の「外的性質」とされる。反対に、〈本〉は色という論理形式を持ち、{〈赤い〉, 〈白い〉}と結合している。このとき、{〈赤い〉, 〈白い〉}は、〈本〉の「内的性質」とされる。内的性質は、対象に備わるあり方の記述ではなく、対象のあり方の記述として適切なものの範囲を意味している。そして対象とは、内的性質によって規定されるものである。「性質」という語を当てはめられるとおかしな感じがするが、『論考』に特有の語法として定着しているものである。

同様に、事態にも「内的事態」、「外的事態」と呼ぶうる区別がありうるのではないかと考えてみよう。再び先述のモデルを使おう。〈本〉が色という論理形式を持ち、その性質として {〈赤い〉, 〈白い〉} という二通りの可能性がある。この状況における事態とは〈赤い本がある〉というような単称的なものと理解してはならないのではないかと。すなわち、{〈赤い本がある〉, 〈白い本がある〉} という複数的・集合的なものこそが事態と呼ばれるべきものではないのか。このように考えてみよう。とりあえず、表記の簡単化のために、単称的な事態をこれまで通り「事態」と呼び、事態が生まれてくるところのいかたまりの複数的な事態を「要素事態」と呼ぶことにする。存在の次元における要素事態に対応するもの、言語の次元における要素命題に対応する。

事態と要素事態の区別を導入すると、要素命題の独立性の問題は次のように理解することができる。論理空間は {P, Q, R, S} のような四つの命題で表現されるのではない。{{P, Q}, {R, S}} のように二つの要素命題で表現されるのである。だから、可能世界はまず {Φ, {P, Q}, {R, S}, {{P, Q}, {R, S}} } と表記され、これはつまり、{Φ, {P}, {Q}, {R}, {S}, {P, R}, {P,

S}, {Q, R}, {Q, S}} に等しい。これは野矢が想定した可能世界の集合に等しい。ひとまず、事態と要素事態を区別することによって、最初から問題の生じない論理空間を構成することができる。よって、この点では『論考』は間違っていない、との解釈が成り立つのである。

ちなみに、ウィトゲンシュタイン自身が「要素命題は相互に独立でなければならない」という点について「間違っていた」と述べている<sup>11)</sup>。これをどう理解するか、という問題は残る。私の考えるところではこうである。〈本〉、〈ノート〉これらの個体についての要素事態は互いに独立であり、要素命題も同様である。そして、個体であるような対象だけを考える限り、同様である。しかし、これら二つの個体が存在するところでは、〈本とノートの間の距離〉という対象が立ち上がってしまう。そして、〈本〉、〈ノート〉のどちらかが成り立たなくなれば、この対象についての要素命題が消滅してしまうのである。このように、ある種の要素事態の間には、依然として独立性が成り立たない。ウィトゲンシュタインは当初、個体以外の対象から発する要素事態を失念しており、後でそれに気づいたのかもしれない。この意味においては、やはり要素命題の独立性は成り立たないのだが、しかし、それは野矢が指摘しているのとは微妙に違う意味において、である。

## V 論理的／経験的可能世界

ここで、可能世界についての概念を整理しておこう。あらゆる世界は、諸事態の成立／不成立の組み合わせとして表現できる。だからまず、論理空間に含まれる諸事態は、〈成立している事態〉と〈成立していない事態〉に分けられる。ある可能世界は、その世界において成立している事態によって表現することができ、それは論理空間の部分集合で与えられる。

とすれば、可能世界の集合は、論理空間のベキ集合で与えられることになるだろうか。違う。これが間違っていることは既に前節で確認した。すなわち、可能世界の集合は、まず要素事態の成立／不成立の組み合わせとして与えられ、それから要素事態に含まれる事態の組み合わせの集合として得られるのである。よって、可能世界の集合は、論理空間のベキ集合よりは小さい。

ところで、これまで考えてきたのは、同じ要素事態に含まれる事態の両立不可能性、たとえば〈この本は赤い〉と〈この本は白い〉が両立しない、ということだった。しかし、別の要素事態に含まれる事態の両立不可能性について考えるとどうなるか。たとえば、〈ある人間Aの体内に血液が1000mlある(しかない)〉という事態と〈Aが生存している〉という事態は両立可能であろうか。常識的には無理である。しかし、この両立不可能性は、先の不可能性とは意味合いが異なるように思われる。このような事態の成立／不成立は論理的な意味においてではなく、経験的な意味において排除される可能性である。それは世界の偶然的なあり方に依存している。

先に考えた可能世界の集合を「論理的可能世界」と呼ぶことにしよう。論理的可能世界の上で、私たちは世界を探求する。そして、経験的な意味で両立不可能な事態を論理的可能世界から除いたものを「経験的可能世界」と呼ぶことにする。このとき、次のような関係が成り立つ。

$$\text{現実世界} \in \text{経験的可能世界} \subset \text{論理的可能世界} \quad (\subset \text{論理空間のベキ集合})$$

論理的可能世界が、私たちの思考の限界である。思考の限界が、経験的に可能な世界を超えていること。このことが、私たちの経験的可能世界の探求を可能ならしめているものである。そのことを次節に見ていこう。

## Ⅵ 主体が生きる場

これまで存在の次元をモデル化してきた。ここでは残り二つの次元を加えて、ひとまとまりの世界モデルとして提示しよう。とはいえ、私たちのモデルにおいては、三つの次元が互いが互いの写像になっているという極めてシンプルな構造を持っているので、新たに付け加えることはあまりない。存在の次元に対応して、思考／言語の次元においては、それぞれ次のような概念が与えられる。

存在	対象	事態（事実）	論理空間	経験的可能世界	論理的 possible world
思考	像	像		経験的可能世界の像	
言語	名	命題		経験的可能世界の体系	

存在の次元における「対象」に対応するものとして、思考の次元には「対象の像」、言語の次元には「名」という概念がある。対象には論理形式があり、それにしたがって結合する。同様に、対象の像と名も、対象と同じ論理形式を持ち、それにしたがって結合する。対象の像が結合したものは「事態の像」であり、名が結合したものは「命題」である。これらは事態と完全に対応する。三つの世界は、完全に対一対一に対応しているのである。同時に、三つの次元は、論理空間と論理的 possible world によって限界付けられている。この点でズレはまったく生じない。

この連結された空間の中で、私たちは世界についての探求を行う。対象を捉え、事実を捉え、可能な事態を捉え、経験的可能世界の全体を捉えようとする。対象の像を、事実の像を、可能な事態の像を、経験的可能世界の像を、作り出す。それが即ち、生きることである。私たちは食べ物をつまみ、食べ物があるところという事実をつまみ、食べ物を食べることによる自身の身体の変化という可能な事態をつまみ、私たちは生におけるあらゆる活動を通じて経験的可能世界についての理解を獲得し、そして、それによって生きる。

世界の探求が可能であるのは、三つの次元がガッチリと連結されていることによる。経験的可能世界の像を作ろうとしている状況を考えてみよう。私たちはできるだけ正確な像を作ろうとするが、その像はしばしば間違っている。しかし、間違っているとすれば、経験的可能世界とその像の間にズレがあることになる。しばしば、その誤った像は経験的可能世界の外にある世界を指していることもあろう。しかし、私たちにあらかじめ経験的可能世界よりも広い領域・論理的 possible world が与えられているので、そうした誤った像もナンセンスではないのである<sup>12)</sup>。そして、誤った像においては起こりえない事態が現実のものとなったとき、その事実の像によって、それまでもっていた像と実際の経験的可能世界の間にズレがあったことを知るのである。そのとき、私たちは誤りに気づき、像の修正を行う<sup>13)</sup>。このようにして漸進的に像は修正され、次第に正しい像に近づいていく<sup>14)</sup>。

ここまではよい。しかし、このモデルには驚くべき特徴がある。それは、探求がいつかどこかで終わりを迎える、ということである。三つの次元は、まったく同じ限界を持ち、互いに対一対一に対応している。ゆえに、仮に間違いがあるとしても、仮説設定とテストの繰り返しかえしによって、漸進的に正しい世界の姿に近づいていくことができる。ここまでは既に述べた通りだ。そして、最終的には一致してしまう。なぜなら、そこに含まれている要素は有限個だからである。つまり、ウィトゲンシュタインは、思考とは最終的に終了しうるものであると考えているのである。

『論考』を頼りにここまで考察してきたモデルは、私たちの生の現実をつまみ、非常に精密で示唆に富んだモデルであることは間違いない。しかし、ここでウィトゲンシュタインが考えている思考というものは、いつか終わりを迎えるものである。ウィトゲンシュタインの考えるところの思考が「終わり

あるもの」であることは、彼自身が『論考』序文に寄せた力強い宣言とも整合する。

…本書に表された思想が真理であることは侵しがたく決定的であると思われる。それゆえ私は、問題はその本質において最終的に解決されたと考えている。

しかし、私たちにとって思考とはそのようなものだろうか。むしろ、それは終りなき営みとしてあるのではないだろうか。仮に終りなきものであるとしたら、これまで述べてきたモデルのどこを修正する必要があるだろうか。

## Ⅶ 語りえぬもの

世界は諸事実へと解体されるのであった。しかし、どうも腑に落ちない。それほど奇麗に世界を諸事実

に切り分けることができるのだろうか。簡単なモデルで考えてみる。世界の中に生れ落ちた私にとって、世界とは混沌であり、分解される以前の一個の全体としてあるのではないか。そのように考えてみよう。しかし、私は世界を一個の全体としたままではいられない。その混沌の中から、まず〈私が存在する〉という事実を取り出そう。すると、世界は〈私が存在する〉という事実と〈世界から〈私が存在する〉という事実を取り除いた残り〉という事実とに分割される。さらに〈私は生きている〉、〈私は存在している〉、〈私は立っている〉といった諸事実を次々と切り出していくことができるだろう。事実とは、このようにして切り出されてくるものではなからうか。

しかし、このように諸事実を切り出してくるのだとすれば、切り出した後に何かが残っているはずである。ゆえに、存在の次元と思考の次元の間にズレがある。これを〈残差〉と呼ぶことにしよう。私たちが事実の一つ一つを認識するとは、世界から一つ一つの事実を切り分けてくることであり、そこには常に何かが残る。これが〈残差〉である。その〈残差〉からは、さらにいくつもの事実を切り分けてくるのが可能であり、実際私たちは次から次へと事実を切り分ける。

それだけではない。既に切り分けた事実を、さらに幾つかの事実と分解することができる。たとえば、〈私は呼吸している〉という事実を、〈私の呼吸筋が動いている〉、〈私の気管を空気が通り抜けている〉といった、そこに含まれているところの様々な事実と分解できる。いや、ここで「分解」という言葉を使うことは、またしてもできない。〈私は呼吸している〉という事実を一つの全体と見なすとき、そこから〈私の呼吸筋が動いている〉、〈私の気管を空気が通り抜けている〉といった、そこに含まれているところの様々な事実を切り出してくるとき、そこにはまたしても〈私は呼吸している〉から〈私の呼吸筋が動いている〉、〈私の気管を空気が通り抜けている〉という事実を取り除いた残り、すなわち〈残差〉があるのである<sup>15)</sup>。

世界から諸事実が切り出されてくるとき、そこには何かが残る。と同時に、切り出された事実を出発点として、そこから幾つもの事実を切り出してくることができ、そこでもまた、何かが残る。切り分けることができるとすれば、それは切り分けるという操作を無限回行うことを意味する。しかし、有限なる存在である私たちには、無限回の操作を行うことはできない。あるいは、〈私は立っている〉、〈私は立っていない〉というように分けるならば、有限個の事実に分けることができると言うだろうか。しかし、これはできない。既に見たように、否定的事態なる概念は成り立たない。ゆえに、否定的事実なるものも成り立たない。私たちは肯定的事実を一つずつ切り出してくることしかできない。よって、そこには必ず何かが残る。つまり、有限の存在である私たちには、世界を完全に解体することはできない。

それだけではない。〈残差〉はいたるところにある。事実・事態から対象を切り出す場合でも、そこ



には〈残差〉がある。たとえば、〈私は存在する〉から〈私〉を切り出してくるとする。しかし、切り出したはずの〈私〉からは、〈私の目〉、〈私の心臓〉、〈私の血液〉、〈私の心〉が切り出されてくる。対象の論理形式を把握する場合でも、〈残差〉が残る。たとえば、ある対象の持つ論理形式全体から〈色を持つ〉という論理形式を切り出してくるとしよう。さらに〈形を持つ〉、〈温度を持つ〉、〈硬さを持つ〉といった論理形式を次々と切り出してくるとしよう。この作業にも際限がない。

〈残差〉が生じる原因は、否定が対象ではなく、操作だからである。〈～であること〉を切り出すときに、残りを〈～でないこと〉として切り出すことが可能であるならば、全体は余すことなく切り分けることができる。しかし、〈～でないこと〉のような否定的事態は事態ではない。同様に、対象を切り出すときにも、論理形式を切り出すときにも、否定を含む対象は対象ではないし、否定を含む論理形式は論理形式ではない。切り出すものは、すべて、肯定的なものである。だから、どうしても〈残差〉が残ってしまう。

〈残差〉は「確かにそこにあるもの」という意味で、否定を含まないものである。しかし、その内実を、肯定的に捉えることができない、肯定的に語ることができないものである。存在の次元において肯定的でありながら、残り二つの次元においては否定的でしかありえないものなのである。この点が決定的に重要である。それは確かに存在するにも関わらず、捉えきれない、語りえない。ゆえに、事態、論理空間、論理的可能世界を構成してゆくその過程において、私たちは〈残差〉を失ってしまうのである。思考が終わりを迎えるのはそのせいである。

## VIII 〈残差〉をいかに取り戻すか

私たちにとっての存在の次元は、思考の次元が捉えた限りのものに限定されてしまう。残された道は二つある。一つは、〈残差〉は永久に失われたものとして諦めてしまうことである。いま一つは、無根拠に〈残差〉の存在を信じることである。

しかし、どうして私たちは〈残差〉の存在を感じられるのだろうか。その存在を信じることができるのだろうか。それは、私たちが、外から到来した何ものかによって、自分の思考の中には存在しなかった領野が開かれる経験をするからである。存在の次元は私たちをほっておかず、向こうから勝手に私たちの元を訪れる。そして、世界の新たな一面を私たちに開示する。私たちは嫌というほどそのような経験をさせられているからだ。それは常に喜ばしいものではない。しかし、そのように何かを訪れるのである。私たちはそこに希望を見出すと同時に、恐れをも抱く。本質的に閉じている思考が決して自らなしえないことという意味において、私たちにとってこれは奇跡である。他方、極めて頻繁に遭遇するという意味において、まったく日常にありふれたことでもある。もちろん、それは〈残差〉の存在を証明してはいない。新たな開示は、今度こそ最後だったのかもしれない。しかし、今までもそうだったように、今もそうであるように、私たちには絶えず新しいものが開示されつづけている。だから〈残差〉を諦める必要はないどころか、それはまったく不合理でさえある。語りえぬものについて沈黙する必要はない。私たちは、完全に合理的なこととして、〈残差〉の存在を信じることができるし、むしろ、信じるように強いられてもいるのである。

## IX おわりに

本稿で検討したことから、正義論について以下のことが主張される。世界と語りえぬものの関係が第VIII節で検討したようなものであるならば、社会がどのような正義に基づいて設計されるとしても、その

社会が正義に適っていると言い切ることはできない。社会が実現した状態は、それがどれほど素晴らしいものであろうとも、まだ開示されていない何かによって、常に異議を申し立てられる可能性にさらされている。その意味で、実際に主張される正義は誤りうるものであり、誤りに備えるものでなければならない。言い換えれば、可謬主義でなければならない。正義の原理は静的なものではなく、〈残差〉から切り出されてくる新しい何者かを常に待ち構え、その内容を更新する動的な原理を含むものでなければならない<sup>16)</sup>。

最後に、残された課題に触れておく。本稿では、言語の次元についてほとんどまったく扱っていない。それは、単独の主体のみを考える場合、言語の次元はまったく不要であるか、あるいは思考の次元の完全な写像である。言語の次元を問題にするには、異なる思考を持つ複数の主体が登場し、互いに交渉しあうような状況を考えなければならない。

### 注

- 1) L. ウィトゲンシュタイン、野矢茂樹（訳）『論理哲学論考』岩波書店、2003年。以下『論考』と略記。
- 2) 『論考』、9-10ページ。
- 3) 野矢茂樹『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』筑摩書店、2006年。以下『読む』と略記。
- 4) 以下、第Ⅱ節と第Ⅲ節は『読む』第2章ならびに第3章の議論に多くを依拠する。ただし、野矢は、可能的なことながら（本稿で言うところの）「思考の次元」にのみ存在すると捉えている。しかし、私はこの見解に賛成せず、存在の次元にも可能的なものがあるという前提でモデルを構成する。というのは、思考より先に、身体の方が可能性を開くとしか言いようのない、そういう場面があるように思われるからだ。たとえば、「どうせ私には無理だ」と思いつつも周囲に強く促されて自転車に乗る練習をしている、その結果、突然自転車を一人で操作できている自分を発見する、というような経験を考えてみよう。このような場面において、可能性はむしろ存在の次元で先に開かれていて思考が後から追いついてくるということが、やはりあるのではなからうか。
- 5) 文中で存在の次元にあるものを表記する場合には、〈 〉で囲んで思考・言語の次元にあるものと区別する。
- 6) 『読む』、38-9ページ。ただし、「性質」、「関係」を対象に含めるという解釈は、必ずしも研究者の間で一致した見解ではない。本稿は、野矢の見解に賛成の立場を取る。
- 7) 「有限」という限定については、『読む』第9章を参照。事態の、そして命題の構成可能性が「無限である」とする立場に反対して、本稿は（野矢と同じく）「上限のない有限である」とする立場を取る。
- 8) 『読む』、100-4ページ。
- 9) この点、『読む』においては、「論理空間」という言葉は（1）肯定的事態の集合、（2）（1）の部分集合の集合、という二通りの意味で使われている。（1）が本来の意味であるが、野矢は、たとえば162ページにおいて、「論理空間」という語を（2）の意味で使用している。本稿では、（1）の意味で統一して用いることにし、（2）については後述する「論理的可能世界」という語を当てる。
- 10) 『読む』第7章。
- 11) 『読む』、147ページ。
- 12) 同じ理由で、文学作品における実際にはありえない世界の描写も、ナンセンスではない、と言うことができる。
- 13) 言うまでもなく、以上の像の修正のプロセスは、カール・ポパーの批判的方法である。
- 14) 私たちが作る像を制約するものは二つある。第一に、その認識する能力に制約を受ける。聞く能力のないものは聞かず、見る能力を持たないものは見ない。しかし、持っている感覚器官などを通して、世界についての像を得る。第二に、その主体の認識する目的にしたがう。何かを食べる存在は、食べられるものと食べられないものを区別する。移動する存在は、自らの身体が進入できる空間とそうではない壁を区別する。仮に、それ以上の欲望を持たない存在であるとしたならば、それ以上詳細な像を作る必要がない。像は、その存在が持っている問いと

Nov. 2006

正義論のための世界モデル：試論

問いへ向かう手段の両方にしたがう。だから、像は、その存在の生そのものである。

どのような生物も、その個体に固有の像を持ち、可能的な世界を了解していると考えられる。食べ物を探す生物は、食べ物が（仮にないとしても）ありえる世界を思考しているのである。ミミズも猫も、可能性の世界を了解している。可能性を了解するために必要なものは像である。可能性を了解するのに、言語は必要なく、像があればよい。

- 15) さらに言えば、人工呼吸器使用者の〈私は呼吸をしている〉からは、〈私の呼吸筋が動いている〉を切り出してくることはできない。〈残差〉からは、それまでは見えていなかった差異が切り出されてくることもある。
- 16) そのような非正当化主義的、可謬主義的正義論の一例として、拙稿「批判的合理主義的正義論」（『情況』2006年5 - 6月号、情況出版:209-222）。

(2006年7月7日受付)